

昭和

写真の1945-1989



第3部「高度成長期」(昭和30～40年代パートII)

開催期間:2007年8月25日(土)～10月14日(日)

会場:東京都写真美術館 3階展示室

「“昭和” 写真の 1945 - 1989 展 第3部」は、高度成長期の光と陰。

元号が「昭和」から「平成」に代わり、早くも20年近い年月が経っています。戦後、日本はさまざまな変化を遂げました。それは焼け野原からの復興であり、人びとの生活の変化でもあります。そのような様子を、写真家たちはどの様に記録し、表現していったのでしょうか。

「“昭和” 写真の 1945 - 1989」展は、2万3000点余におよぶ東京都写真美術館の収蔵作品の中から選りすぐりの約600点によって、4部構成にて戦後の「昭和」をご紹介します。シリーズの第3部は、私たちの価値観を激変させた高度成長期がテーマです。

展覧会概要

■ 第3部 ■

「高度成長期」(昭和30年代、40年代パート)

開催期間：2007年8月25日(土)～10月14日(日)

昭和30年代は高度成長期時代を迎え、人びとの生活状況や都市の風景が急速に様変わりしていきました。写真家の視点もリアリズム的に場景を捉える写真から、それぞれの作家の持つ主観をうつしだす情景へと変化し、「コンポラ写真」や自分の私生活を表現していく「私写真」など、より内的な世界を表出するような写真が現れてきました。

(担当：藤村 里美)

< 出品作家 > (出品点数132点)

秋山亮二、荒木経惟、石元泰博、臼井薫、植田正治、英伸三、大東元、川田喜久治、北井一夫、桑原史成、熊切圭介、牛腸茂雄、小原健、佐藤明、藺部澄、高梨豊、田沼武能、田村茂、田村彰英、丹野章、常盤とよ子、内藤正敏、長野重一、奈良原一高、東松照明、深瀬昌久、細江英公、森山大道、柳沢信

< 出品資料 >

中平卓馬『来るべき言葉のために』(風土社) 昭和45年

森山大道『写真よさようなら』(写真評論社) 昭和47年4月15日

多木浩二、中平卓馬(編)『まずたしからしさの世界をすてろ』(田畑書店) 昭和45年

ほか、『PROVOKE』『写真映像』より出品

< 展覧会構成 >

パート1: 高度成長期の風景—時代の光と影

昭和31(1956)年の『経済白書』には「もはや戦後ではない」と記され、高度成長期が幕開けした。人々のライフスタイルが急速に変化し、生活は豊かになった。しかしその一方で世界は冷戦状態に突入し、日本でも公害などが問題化され始めていた。この時代は明るい出来事の影で、今も解決のつかない問題が起こった時代でもあった。

こういった時代の表現は、戦後のリアリズム写真の影響が大きかったが、社会的現実を即物的に記録するばかりでなく、場所や事柄に長く関わり、冷静な視線によって背景や問題点を浮き彫りにする、新しいスタイルの社会的なドキュメンタリー写真の台頭があった。

パート2: 写真表現の世界Ⅰ—戦後派(アプレ・ゲール)

「10人の眼」展は昭和32(1957)年に写真評論家の福島辰夫の呼びかけで第1回展が開催された。テーマや表現方法は様々であったが、皆、戦後に写真家として活動を始めた者たちで、戦前の写真家とは断絶した立場で写真表現を捉えようと試みていた。かれらの写真のいくつかは抽象的であると批判された。だが社会の中では高度成長による歪みがあちこちで噴出しており、それまでのような方法ではとらえきれなくなった時代や社会に対する彼らなりの表現方法であったのだ。

パート3: 写真表現の世界Ⅱ—ブレボケ・コンポラ・私写真

昭和20-24年頃の第1次ベビーブームに生まれた団塊世代は、昭和47(1972)年に史上最高の婚姻件数を記録する。この時期に流行したフォークソングの「神田川」などに象徴されるように、彼らの新しい思想やライフスタイルが、これまでの家族制度やモラルにゆさぶりをかけていた。価値観の急激な変化は、自我に対する問いかけを促し、写真においても、プライベートな視点による表現が目立ってきた。しかし一見私的に見える写真においても、その表現には社会全体への問題意識があぶりだされていることを見逃してはならない。

第1部(終了)、第2部(終了)、第4部(10月開催)の概要は下記をごらんください

■ 第1部 ■

「オキュパイド・ジャパン（占領下の日本）」（昭和20年代）→ **展覧会は終了しました**

開催期間：2007年5月12日（土）～6月24日（日）

1951年のサンフランシスコ講和条約まで日本が占領下に置かれていた時代、日本からの海外に出される輸出品などのラベルには「Occupied Japan」と記されています。この言葉に象徴される時代において戦争の惨禍の後に、新しく都市が形成され、人々の価値観も大きく変化していきました。そして、写真家たちも新しい価値観をもってこの時代を捉えたのです。

展示は、＜パート1＞廃墟 - 焦土からの出発 ＜パート2＞オキュパイド・ジャパン - 闇市・P.X.女性 ＜パート3＞解放 - エロスとリアル ＜パート4＞復興 - 「戦後と」という風景、の4つのパートで構成しました。（出品点数125点）（担当：金子 隆一）

＜出品作家＞山端庸介、濱谷浩、林重男、林忠彦、大束元、師岡宏次、中村立行、笹本恒子、木村伊兵衛、園部澄、菊池俊吉、田村茂、福島菊次郎、大竹省二、樋口忠男、東松照明、稲村隆正、真継不二夫、杉山吉良、福田勝治、大辻清司、吉岡専造、三木淳、渡部雄吉ほか

■ 第2部 ■

「ヒーロー・ヒロインの時代」（昭和30年、40年代パートⅠ）→ **展覧会は終了しました**

開催期間：2007年6月30日（土）～8月19日（日）

スポーツ選手から俳優、歌手、政治家まで、さまざまな煌めくヒーロー・ヒロインたちが活躍した昭和30～40年代。本展では、東京都写真美術館の2万3000点余の収蔵作品より、ポートレート写真というジャンルを通して、エネルギーに満ちあふれたヒーロー・ヒロインの姿を捉えた写真家たちをご紹介します。時代の顔というべきヒーロー・ヒロインの存在は、激動する昭和中期の熱い時代の空気を、ダイレクトに私たちに伝えてくれるでしょう。

（出品点数128点）

（担当：鈴木 佳子）

＜出品作家＞秋山庄太郎、石井幸之助、石元泰博、稲村隆正、大竹省二、小川隆之、木之下晃、繰上和美、齋藤康一、佐藤明、沢渡朔、篠山紀信、ジョージ・S・シンベル、高梨豊、立木義浩、中村正也、林忠彦、早田雄二、藤井秀樹、細江英公、松島進、松本徳彦、三木淳、ウィリアム・ユージン・スミスほか

■ 第4部 ■

「オイルショックからバブルへ」（昭和50年代以降）

開催期間：2007年10月20日（土）～12月9日（日）

経済の低成長が恒常化し、戦後派世代が「ニューファミリー」と呼ばれ、世代構成の中心を担うようになりました。その中で地域社会だけではなく、家族までもが崩壊し、個人主義が蔓延する中、写真家たちの視線は、自らの内面を見つめ、社会に孕む問題を作品の中に移し込んでいきました。

（担当：藤村 里美）

＜出品予定作家＞石内都、伊奈英次、大西みつぐ、尾仲浩二、小林のりお、雑賀雄二、柴田敏雄、島尾伸三、須田一政、築地仁、土田ヒロミ、橋口譲二、畠山直哉、宮本隆司、山内道雄、山崎博、渡辺兼人ほか

展覧会公式ガイドブック「昭和の風景」（新潮社「とんぼの本シリーズ」）

展覧会の主要作品を網羅し、その時代背景や写真史的な位置づけを担当学芸員がやさしく解説した、公式ガイドブック写真集です。

好評発売中！＜税込2100円＞ A5版208ページ（図版掲載数 約160点）

「第3部」担当学芸員による展示解説

第3部展覧会開催期間中の第2・4金曜日16時～担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会関連：連続講座『昭和の写真史』開催中！

第1回：6月15日（金）「オキュパイド・ジャパン（占領下の日本）」→終了しました

第2回：8月10日（金）「ヒーロー・ヒロインの時代」→終了しました

第3回：9月14日（金）「高度成長期」（昭和30・40年代パート）

第4回：10月26日（金）「オイルショックからバブルへ」（昭和50年代以降）

受講料：各回とも無料（この講座では、新潮社『昭和の風景』を副読本として使用します。お持ちでない方の受講には、資料代2,100円（税込み）が必要となります。）

会場：東京都写真美術館 1階アトリエ 定員：40名（当日先着順、各回とも18:00から受付開始）

<開催概要>

展覧会名称 「昭和」写真の1945 - 1989

主催 東京都 東京都写真美術館

開催期間 第1部「オキュパイド・ジャパン（占領下の日本）」（昭和20年代）
2007年5月12日（土）～6月24日（日）→終了しました
第2部「ヒーロー・ヒロインの時代」（昭和30・40年代パートI）
2007年6月30日（土）～8月19日（日）→終了しました
第3部「高度成長期」（昭和30・40年代パート）
2007年8月25日（土）～10月14日（日）
第4部「オイルショックからバブルへ」（昭和50年代以降）
2007年10月20日（土）～12月9日（日）

休館日 毎週月曜日（月曜が祝祭日の場合は翌日）10月1日（都民の日）は臨時開館
観覧料 一般500（400）円、学生400（320）円、
中高生・65歳以上250（200）円

（ ）内は20名以上の団体料金。小学生以下、障害をお持ちの方とその介護者は無料。第3水曜日は、65歳以上無料。

開館時間 10:00～18:00（木・金は20:00）入館は閉館の30分前迄

<お問い合わせ先>

東京都写真美術館 事業企画課企画係 金子 隆一 r.kaneko@syabi.com（第1部担当）
鈴木 佳子 y.suzuki@syabi.com（第2部担当）
藤村 里美 s.fujimura@syabi.com（第3・4部担当）
事業企画課普及係 久代 明子 a.kushiro@syabi.com（広報担当）
島津 彰子 a.shimazu@syabi.com（広報担当）

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 電話 03-3280-0034 FAX 03-3280-0033

<プレス用掲載図版：第3部「高度成長期」>

表紙および次項の図版をデータにてご用意しています。広報担当までご連絡ください。

表紙 田沼 武能	落書き遊びも危険になった 東京、台東 昭和34(1959)年
1. 森山 大道	にっぽん劇場（戸波龍太郎一座）2、「にっぽん劇場」より 昭和41(1966)年
2. 東松 照明	爆心地から約0.7kmの上野町から掘り出された腕時計、 「<11時02分>NAGASAKI」より 昭和36(1961)年
3. 英 伸三	農業散布、「農村からの証言」より 昭和42(1967)年
4. 川田 喜久治	原爆ドームと太陽 爆心地、「地図」より 昭和34-40(1959-1965)年
5. 奈良原 一高	「人間の土地 緑なき島・軍艦島」より 昭和29-32(1954-1957)年
6. 細江 英公	おとこと女 3、「おとこと女」より 昭和35(1960)年
7. 長野 重一	5時のサラリーマン、「ドリームエイジ」より 昭和34(1959)年
8. 桑原 史成	水俣病(5) 元網元の漁師の手、「水俣病」より 昭和45(1970)年
9. 石元 泰博	街、東京 175 昭和33(1958)年頃
10. 田村 茂	安保闘争、「わがカメラの戦後史」より 昭和34(1959)年
11. 深瀬 昌久	洋子、九段 昭和38(1963)年
12. 北井 一夫	少年行動隊 結成の日、「三里塚」より 昭和45(1970)年
13. 高梨 豊	新宿区 伊勢丹、「東京人1964～65」より 昭和40(1965)年
14. 荒木 経惟	センチメンタルな旅、「センチメンタルな旅」より 昭和46（1971）年

<掲載に際してのご注意> 1. 図版はトリミングできません。 2. 図版をご掲載の際は、必ずキャプションもいっしょにご記載ください。 3. 掲載前にグラを拝見させていただきますようご配慮をお願い申し上げます。 4. お渡しした図版は、本展の紹介以外での目的では使用できません。このことに関して発生したトラブルについて当館は一切責任を負いかねます。 5. 作品図版は実際の展示と異なる場合があります。 6. 掲載紙をご寄贈いただきますようお願い申し上げます。

第3部 高度成長期 プレス用図版

